

CURES

NEWSLETTER

地域経済
ニュースレター

1998.2.25 No.45

巻頭言

サッカーを通して日韓の交流から協力関係へ

ナム サン ニョン
南 相 斐

W杯初出場となった日本のサッカー

1998年1月1日、韓国の『東亜日報』は新年の特集号に、岡田武史と車範根（チャ・ボムゲン）日韓両国サッカーチーム監督の対談を大きく載せた。記事によれば、この対談は、フランスでのサッカー・ワールドカップ（以下、W杯）本選と一緒に進出できたことを記念して日本の朝日新聞社との共同企画で行われた。初めて顔を合わせた二人だが、岡田はコーチ修業を、車は選手生活をともにドイツで経験したので、ドイツ語で冗談まじりの会話をし、98W杯本選で一緒に頑張ることを誓った。岡田の「(98W杯本選で)韓国がまず

ベスト16に登り詰めたら日本もその後を追う」との謙虚な言葉に対して、車は「緻密で誠実な監督を新しく迎えた日本は98W杯本選で必ず突風を巻き起こすだろう」と、答えた。そして、手をしっかり取り合った二人の写真も掲載された。

車は、韓国の1997年の「今年の人物」として選ばれた人。1990年代のバブル経済の崩壊によって不況が長引き、ついに「IMF時代」が始まった韓国。大統領選挙における「誰が選ばれても同じ」という政治家への強い不信感。そして今年は失業者が百万人とも二百万人とも生じるだろうといわれる暗い時代。そ

- 巻頭言南 相 斐
- CURES Report
「MAFIA CAPITALISM IN POSTCOMMUNIST BULGARIA(PART I)」・Dimitar Ialnazov
- CURES Salon
「色彩について」加 藤 峰 弘
- 地域経済文献情報

金沢大学経済学部

の中で98W杯の本選進出を決めたことは、韓国人にとって唯一の明るいニュースであった。韓国としては4度目のW杯本選出場だったが、韓国が2002年のW杯開催地の一つとして決まったこともあってその喜びはさらに増した。

しかしその韓国人の喜びも、念願のW杯への初出場を決めた日本人には比べものにならないのではないだろうか。1997年は日本のサッカーの歴史において記念すべき年になったからである。もちろん、日本は2002年のW杯の開催地の一つなので、2002年には自動的に本選出場できる。しかしそれが初出場となつてはカッコ悪い。日本と韓国がW杯開催地をめぐる競争していたとき、「日本はサッカーの実力も低いのにお金があるからと言って、2002年のW杯大会の開催地として選ばれるのはおかしい。お金で買うのも同然」と、厳しい批判をする日本人学生がいた。しかし、今回の初出場決定でその批判も和らぎそうだ。

韓国人も日本チームを応援した対イラン戦

日本が98W杯の初出場を決めた最終予選のイラン戦には、日本人の多くが関心を示した。「イラン戦を見なかった日本人は非国民」と半分冗談で言われるほど日本人のW杯本選出場への思いは熱かった。11月16日、マレーシアで行ったイラン戦は、フジテレビ系の平均視聴率47.9%、瞬間最高視聴率57.7%を記録した。それに衛星放送を含めるとさらに高い視聴率だったろうと日本の各新聞は伝えている。

しかし、この日本対イラン戦に高い関心を示したのは日本人だけではなく。韓国でも二つの放送局が生中継を行い、その視聴率は48.8%を記録した（『東亜日報』1997年11月18日付）。そして、翌日の韓国のテレビでは日本の勝利をトップ級のニュースで扱い、「これで2002年に向け、日本は本当の同伴者になった」と報じた。また、『東亜日報』は「日本、韓国と一緒にフランスへ行く」とスポーツ欄の半分を割いてその勝利の様子を詳しく伝えた。韓国に滞在している日本人の中

には、韓国人から「祝賀^{チュウカ}ハムニダ（＝おめでとう）」とお祝いの言葉をもらった人も多かったという。韓国人も日本のサッカーチームを応援し、その勝利を日本人とともに喜んだのである。その様子は『朝日新聞』や『毎日新聞』などによって日本にも伝わっている。

過去の歴史に引きずられている韓国人

韓国人が心から日本人を応援し、その勝利に拍手を送ることは、日韓の不幸な歴史を背負って生きる状況の中ではそんなに簡単なことではないだろう。

1936年、ベルリンオリンピック大会に韓国人マラソン選手孫基貞（ソン・キジョン）は、当時朝鮮は日本の植民地だったため、日の丸が画かれた服を着て参加した。そして彼は金メダルを獲得したものの、やはり競技場には日本の日の丸が揚がった。当時の『東亜日報』は、日の丸を消し月桂冠をかぶった孫の写真を載せた。それは朝鮮人に大きな勇気と希望を与えたが、『東亜日報』紙は朝鮮総督府から無期限の発行停止を命じられた。

その一連の出来事は長らく韓国人の間で語り継がれ、教科書にまで登場した。そして、1988年ソウルオリンピックにおいて韓国が男子マラソンで金メダルを獲得すると、韓国人は再びベルリンオリンピック大会を思い起こし、韓国の旗が競技場に掲げられた喜びを噛みしめたのである。

そして、「何が何でも日本にだけは勝たねば」という韓国人の強い執念は、日本から解放後50年を過ぎても衰えていないようである。1997年9月28日、東京国立競技場で行われたW杯予選の一回目の日韓戦は、試合終了直前2点を取り韓国の逆転勝ちとなった。「日本にだけは」という韓国国民の期待に応じた試合だったと言える。

「ウルトラ日本」と「赤い悪魔」の交流

しかし、11月1日、ソウルで行われた二回目の日韓戦はそれまでとは違っていた。日本

からは「ウルトラ日本」を初めとするサポーターたち一万人が、日の丸や日の丸のステッカーを張り付けたユニフォームを着て、ソウルのジャムシル競技場に押し掛けた。8万人で埋め尽くされた競技場に、韓国人の嫌いな日の丸が目の前で堂々とはためき、「ニッポン」と叫びながら応援する日本人の様子は、新しい時代を予感させるものであった。

試合に先立ち「ウルトラ日本」の応援団が金浦空港に入国すると、そこには日本の応援団の旗を手を持って出迎える韓国のサッカー応援団「赤い悪魔（ブルゲンアクマ）」たちの姿があった。彼らは互いにインターネットと電話を通じて交流してきたという。また、「ウルトラ日本」の応援団が「ブルゲンアクマ」を訪問。試合の結果にこだわりなく、「韓国と日本がスポーツを通じて交流を深めよう」と「よい応援対決」を誓った。試合結果は2対0で韓国負け。それにも関わらず、試合終了後も両国の応援団は1時間余り応援戦を繰り広げた。「ウルトラ日本」が反対側の韓国の応援団に向かって「コリア」「韓国」と叫ぶと、「ブルゲンアクマ」は日本側の応援団に向かって起立拍手で答えた。そして、一部の人は互いのユニフォーム（日本は青色、韓国は赤色）を交換しながら友情を確認した。ある「ブルゲンアクマ」の会員の一人は、「韓国が負けて気分を損なったけれど、日本のW杯の本選進出を応援するためにはるばる韓国まで来た『ウルトラ日本』の友だちの嬉しさがっている様子を見て、それを慰めとする」と言った（『東亜日報』11月2日付）。

日韓「同伴者」の新しい時代へ

このような当時の韓国の様子について、岡田監督は、「（ソウルでの日韓戦で）一番印象的だったのは、試合に敗れたにもかかわらず韓国の観衆は日本に友好的だったことだ」と後に述べている。実際、韓国がW杯への本選出場を決めた後、ソウルでの第二回戦は日本に譲って欲しい」「日本に勝たせて欲しい」

という韓国人のファンからの電話が車監督宛に多くあったという。「日本に勝たせて、一緒にフランスへ行こう」という韓国人の声は、日本の『読売新聞』（11月18日付）によって日本にも伝わった。そして、日本人からは「負けてくれてありがとう」との挨拶を韓国人にする日本人もいたが、韓国が日本に勝たせたのかどうかは問題ではない。重要なことは、「一緒にフランスへ」と日本を「同伴者」として思っている韓国人が多かったことである。新しい時代を予期する出来ごとである。

『朝日新聞』は11月18日の社説で「W杯で近づいたアジア」と題し、日韓の新しい関係への期待を込めて次のように述べた、

「両国（日韓）ともサッカーファンには若い世代が多い。サッカーが、日韓の間によどむわだかまりを少しでも和らげ、新しい関係を切り開くきっかけになるのではないか」

サッカーを通して近づいた日本と韓国。2002年のW杯が北朝鮮をも含めて開催されれば、日韓朝へと交流や協力はさらに広がる。実際、韓国人の約8割が北朝鮮との共同開催を望んでいる。その実現は政治的な問題が絡み簡単なことではないだろう。しかし、それに向けての努力はやってみる価値はある。北東アジアにおける平和、そしてそれが世界平和につながることであればこそである。

その第一歩そしてまず、W杯への関心を持つ。関心がなければ理解することも、交流や協力することも出来ないからである。日韓の経済交流には、とかく人と人との交流の要素が欠けていると言われる。このようなスポーツ交流など一見経済交流から距離のあることも、経済交流の基盤をより確かなものにしてゆくだらう。そして、その一環として日本人と韓国人が、ドイツ語や英語だけでなく、韓国語、日本語という互いの言葉を自由に使えるようになる時代が、間もなく来るだろう。

（金沢大学経済学部助教授）